2023 優駿エッセイ賞
佳作（GⅢ）
受賞作

クランジの奇跡

ホリ・カケル

受賞のことば

3年前に父のことを書き、2年前に大叔父のことを書いて受賞させていただいたので、次に書くなら自分自身のことだと思っていました。しかし、思いが空回りして昨年は応募できず。今年も応募を諦めかけていましたが、そんな時にシンガポール競馬廃止のニュースを知り、「書くなら今しかない」と思って、記憶を辿りながら一気に書き上げました。これからも競馬のある生活に感謝し、競走馬たちの走る姿を目に焼き付けたいと思います。

プロフィール
兵庫県生まれ。有線放送会社、出版社勤務などを経て、現在はフリーライター、編集者、翻訳者として活動。趣味は競馬観戦と一口馬主。最も好きな馬はキングヘイロー。

シンガポール競馬が２０２４年10月の開催を最後に１８０年余りの歴史に幕を閉じる。6月のある日、そんなニュースが目に飛び込んできた。近年はカジノ人気に押され、コロナ禍もあって客足が遠のいていたとのことだが、僕の中でシンガポール競馬といえば、２０００年に完成したクランジ競馬場や、国際Ｇ１のシンガポール航空国際カップ、そしてスプリンターズＳに乗り込んできたロケットマンの印象が強く、アジアでは日本や香港の次に競馬が盛んなイメージがあった。

そんなシンガポール競馬が廃止されてしまうなんて。ニュースを見て、すぐに思い浮かんだのは、初めてクランジ競馬場を訪れた日のことだった。引き出しの奥から古い日記を取り出し、あの日の自分に思いを馳せる。

僕がクランジを訪れたのは２００５年の4月。コスモバルクが日本馬として初めてシンガポール航空国際カップを制する約1年前のことだった。訪れる直前に、勤めていた会社を辞めてフリーランスになった。そう書けば聞こえはいいが、実際は前年の11月に過労とストレスで体調を崩したことによる退職だった。処理能力を上回る業務を背負って必死に働いた結果、通勤途中の路上で倒れ、目が覚めると病院のベッドの上だった。療養期間が長引くと、上司の反応が「早く戻ってこい」から「早く辞めてくれ」に変わり、さまざまな圧力を受けて気持ちが折れてしまい、そのまま退職した。会社を辞めたことを知人に報告すると、何人かは自分の会社に転職するよう声をかけてくれた。どれも魅力的な話だったが、心の傷がまだ完全に癒えておらず、人前に出ることが怖かったので、入社ではなく外注先としてフリーランスで業務を引き受けることにした。そんな中、再出発の旅の場所として選んだのがシンガポールだった。

航空券が安い時期を探したら、ちょうど皐月賞の週になってしまった。未来の三冠馬が無敗で皐月賞を制するのを競馬場で見たい気持ちもあったが、今までの自分を変えたい思いが強く、異国の一人旅のほうを選んだ。競馬に対する思いは、クランジ競馬場でのレース観戦を予定に入れることで埋め合わせた。

観戦当日、クランジに向かう夕方の地下鉄は大勢の乗客で混雑していた。そのほとんどが競馬ファンだったらしく、クランジ駅で降りて人の流れに沿って歩くと、ほどなく競馬場に着くことができた。

この日はナイター開催で、１Ｒが18時30分に始まり、最終の８Ｒまで30分間隔でレースが行われることになっていた。最初はパドック付近にいたが、レース開始前から混雑して落ち着かなかったので、上の階にある「ハイビスカス」という有料のラウンジ席に移動する。外国人はパスポートを見せて20シンガポールドル（当時は1シンガポールドル＝約65円、以下「ドル」で表記）を払うと中に入ることができた。大きなレースがない日だからか、ハイビスカスには客が数えるほどしかいなかった。

競馬場の建物はとても綺麗で、観客が少なかったこともあり、１３００円ほどで贅沢な気分が味わえた。これならレースの予想に集中できる。僕は何の情報も持たないまま１Ｒから馬券を購入することにした。

マークカードを塗って買うのは日本と同様だが、最小購入単位が単勝と複勝は5ドル、他は2ドルとなっている。それに気づかずに1番の馬の単勝馬券に1ドルだけ払おうとしたら、窓口の女性に「ノー、ノー、5ダラー」と指摘された。

１Ｒは逃げた1番がそのまま5馬身差をつけて快勝。「1Ｒだから1番でいいや」と安易な気持ちで買った馬券が、記念すべきシンガポール初的中馬券となった。単勝は２・４倍付いて、5ドルが12ドルになった。

２Ｒからは2ドル単位で買える馬連で勝負する。ただし、データがなくて、まともに考えてもわからないので、日本で馬券を買う時によくやる二つの方法を実践することにした。

一つ目は「1番人気、3番人気、7番人気」の馬連3頭ボックスの購入。個人的にこの馬券とは相性が良く、的中すれば高配当になることもあるので、オッズだけ見て馬を選ぶことにした。もう一つは、的中馬券を買った窓口や券

売機で買い続けるというもの。ハイビスカスは券売機ではなく、窓口の女性にマークカードを渡して馬券を購入するので、僕は1Rを買った時と同じように、左端から2番目の窓口に行き、担当の女性にマークカードを渡して馬券を買った。するとレースは、購入時に1番人気だった馬と3番人気の馬で決着し、馬連17倍が的中した。

3Rも同じ方法で、馬連18・5倍が的中した。左端から2番目の窓口の女性は、もしかしたら勝利の女神かもしれない。僕は今日1日、彼女の窓口で買い続けることを決めた。

4Rの前に、馬券購入と的中馬券の払い戻しのためにその窓口に行くと、両隣の窓口の女性が女神に向かって「この男性、いつもあなたのところに来るわね。気に入られているんじゃないの?」とからかうように話していた。女神はその質問には答えず、代わりに「この人、これまでのレースを全部当てている」と二人に明かしてしまった。これにより、「一人で来た日本人が1Rから全部的中している」と、窓口のスタッフに知られることになる。

4Rも3頭ボックスで馬連9倍を的中。女神に的中馬券を渡すと、両隣の女性が歓声を上げ、その声がハイビスカスに響いた。

お腹が空いたので飲食コーナーでホッケンミー（福建麺）を注文すると、席まで料理を運んできたボーイが「グレイト!」とサムズアップしてくれ、観戦に来ていた地元のおじさんが「これを飲めよ」と、タイガービールのジョッキを差し入れしてくれた（そして僕の5Rの馬券を覗き込んで席に戻っていった）。

その5Rの馬券は、3頭に絞ることができず、資金も増えてきたので馬連4頭ボックスを購入。最後まで消すかどうか迷った馬が1着、人気薄の馬が2着となり、馬連75・5倍の高配当が的中した。レースが終わった瞬間、僕が窓口の方を見て、両手で大きな円を作ると、スタッフが拍手で応えてくれた。

さっきタイガービールをごちそうしてくれたおじさんは、満面の笑みで2杯目のジョッキとソーセージを持ってきた。きっと5Rで大きく儲けたんだろう。僕がまだ6Rのマークカードを塗っていないのを見て、何か言いたそうな顔をしていたが、僕の肩を叩くと、そのまま自分の席に戻っていった。

食べたり飲んだりで忙しくしながらも、6Rは人気馬の複勝1点勝負で無事に的中。ガッツポーズをすると窓口のスタッフだけでなく周囲の観客までも拍手してくれるようになった。これで6連勝。残るレースはあと2つ。この頃にはタイガービールのおじさんだけでなく、他の客も僕の席にやってきて、レーシングプログラムを覗き込むようになっていた。

普段から一人でいることに慣れていて、旅行中も誰とも話をしていなかったから、こんなふうに知らない人が近づいてくると、どうしても警戒心や恐怖心を強く抱いてしまう。でも、いろんな人が僕の馬券で盛り上がるのを見て、次第に人との触れ合いが楽しく思えるようになった。人と話すことを怖がっていた僕が、シンガポールで現地の人々とコミュニケーションを取っていることがうれしく、自分でも信じられなかった。あと2レース的中させて奇跡を起こせば、みんな喜んでくれるかな。いつの間にか、彼らのために馬券を当てたいとの思いが大きくなっていた。

人気馬の複勝ばかり買えば的中する確率は上がるはず。そんな安全策もよぎったが、7Rは再び馬連3頭ボックスで挑むことに決めた。窓口の女神にマークカードを渡すと「グッドラック」とエールを送ってくれた。

レースは僕が買った2頭が最後の直線で逃げ馬を捉え、ゴール前で上位2頭に躍り出た。

「よし、馬連的中、7連勝だ!」

そう思った瞬間、後方にいた1頭が大外から桁違いの末脚で全馬まとめて差し切った。オライリー産駒のリアルウォリアー。シンガポールで見た競走馬で唯一、今も名前を忘れることができないこの馬の追い込みによって、僕の馬券は外れてしまい、クランジの奇跡へのチャレンジはここで終わった。

レースを見終えて後ろを振り返ると、窓口の女神たちがこちらに視線を寄せていた。僕が両手で×印を作ると、彼女らは「オーマイガー」「アイヨー」などと口々に残念がった。

悔しすぎる結果だったため、最終レースを予想する気力もなくなり、この敗戦で切り上げることにした。7戦6勝。往復の航空券代ほどの勝利を手にし、シンガポール競馬の初観戦は終わった。

帰り際、窓口の女神に挨拶すると「楽しかったわ、また来てね」と言ってくれ、他のスタッフも笑顔で見送ってくれた。食事を運んでくれたボーイは「トライアゲイン!」と背中を叩いて送り出してくれた。

ハイビスカスを出て、下りエスカレーターに乗った瞬間、大粒の涙がこぼれ落ちた。人間関係がうまくいかず、心のバランスが崩れ、人前に出ることが苦手だった僕が、自信もなく、新しい仕事への不安が大きい中、訪れたクランジ競馬場で素敵な人々と出会い、彼らから笑顔や拍手を送ってもらった。これって全レースを的中することよりも、ずっと大きな奇跡だったのかもしれない。

18年前のクランジ競馬場で起きた、僕以外の誰も覚えていないような小さな奇跡の物語。それは、この地に競馬場があり、そこに集まった人がいたから誕生したものだ。競馬場がなくなれば、競馬を通じた出会いも感動も思い出も、生まれることはなくなってしまう。

どうか来年の秋までに、少しでも多くの人に「クランジの奇跡」が訪れますように。